[illegible]

ふかがは

へ 5
6623

BB28
加藤
学部図書に移管 48年 6月 8日

壬申九月に江戸へ
くだり芭蕉庵に旅寝
してこゝめし歳
けふのまゝしめん深川に
のかりて
ふろしきをとく

洒堂
編

早稲田大学教育学部図書
60427
<2000-384>
ヘ5
6623

深川夜遊

青くても有べきものを唐辛子　芭蕉
提ておもたき秋の新ら鍬　洒堂
萱の月欅(ケヤキ)のこ川をかゝよせて　嵐蘭
暁まかし雑の先にたゝる　岱水
松山の腰は躑躅の咲わたる　堂
焙炮置て茂るゝ深川舟　蕉

窺ひ日和に冴かへりたる小豆粥　水

ふすまに掴むて洗ふ油手　蘭

掛乞に燕のこころを持せてや　蕉

聟なに座りみて軽く下戸の往来　堂

寒徹す山荘藪の中返り　岱

正に気殺のむ風のかなしさよ　子

目の張のそんしのなきハ忘てやりて　堂

き粉もふりに抱きあさゆる　蕉

踏まよふ蕨花の雪の朧月夜　子

郷習は御山篭まで遠きみて　蘭

弓はしめすくおさへてるむ寸手をなる　蕉

荷とりたる士の海へ飛ひこむ　堂

名
町中の高居ハ赤くきみんとして　岱

吹ちらしてらす野にかしつある　水

草鞋に地雷踏まず秋の霧　堂

伏見あたりの古き屋の月　蕉

声の北里菊かくまけハ懐しや 水

我かはらしも鉦敲うち集る 蘭

山伏を切てかけたる関のおか 蕉

燈もとねハかくしぬよの中 堂

付合ハ皆上戸にて呑あかし 葉

けつはなりしと霞深くし 子

寒か捨て和尚ハ乳にあるゝ處し 堂

たてこめくあれたの大日 蕉

樸(ウハゴ)揚(ケ)ての田も蓄く人の夢 子

延行花のを鯨よけゆく 葉

不引たつ池鯉鮒の宿の木綿市 蕉

ご浅抱へこむ土間のへつゐ 堂

米と再人かくれさる花見せて 葉

絶ゑのれほろくまきれよかすの師 水

艸庵乃留主　　杉風

冴(サヘ)ゑもる鐘撞く十夜の帰り月　　洒堂

志のひ逢し和乃こ頭檑(タイく)　　曽良

馬取代御肌(ハダ)脊(セ)寒し霜ふりて　　石菓

鵆から吹きまの提灯たてゝうる氣　　桃隣

人参も清盛出る日の賑(ニギヤ)かさ　　宗波

えらし寒(タル)さの頭松あしかし

ウ

中形の染ぬきも撥訓て　筆

きゝの浅く承　鰭一皿　凡

蓮の葉はちいさき岸の杜若　堂

地を摺うつわか鶴丸振袖　良

又六人天台坊をいろめかて　菓

たわみなさけなくそふる婦し　陵

月おそき八川の夜鞍を打仕廻　波

薔薇園の時宜とゝあゝれ秋の暮　堂

玉子吸数もかしき濡酒　風

あら安いまた承細布(サイフ)とも成　菓

花の雲小田原陣の前乃年　陵

湯あがり着てかも淀川筋　波

名
雛園の男は留し女房の声　良

寂然り證する硯の掛けの　凡

藍木一銚かちてもまたかわら　堂

節季作をむさ雪丸鞠笠　良

出替りて菜の畑見る後姿合　菊

島をへつゝ　吉田　岡崎。　蘿

両がへこそ月に浅黄雲　波

涼みかねつる狗乃こゝろ追　堂

ひやゝかに中稲の花を吹残し　風

山乃内裏見ゝ舞もまゐる家　菊

象牙の麈をかくさき指まで擇分る　良

下草は紅ぢ散敷のかへりやく　波

ウ
なるかる向ふの見え無の竹垣それ　蘿

皆ちらゝく水らしく傘　風

あれ男や離しと路を走てふさがれ　堂

駿河乃田植ゆきて輪いくゝく　良

長持に注連ひらし見ゆる花の襟　菊

雲と花嗚る川春も濁しけ　波

めりし宗鑑の古

奥の菓一斗米不稼

下戸も亭主の付合

大事なりし　酒堂

洗足に客と名の付寒さかな　許六

綿館(ワタヤタテ)双みゑゝむしされ星　芭蕉

鷦鷯(ミソサザイ)階子乃鎰(カギ)を伝ひ来て　嵐蘭

まつかぜくゝまゝのしなりくさもち

月の氣も氷ものこる小鍋賣　六

築地乃ところに典藥のかゝる　堂

相國寺杜丹の花のさかりにて　蘭

椀の蓋とる蕗に竹の子　皃

西戎乃弓はりて草まくら　堂

むかし咄に野郎泣する　六

きぬ〳〵は宵の踊の箔をきて　蕉

東追手乃月も澄きる　葉

青海の板に割す露の音　六

ふるされ柱枕あとさんすゝく　堂

淀飛脚の挑灯しるき鈴の風　葉

汐さしのぼる風星川の橋　蕉

村ハ花田つゝじの茶花まじりに　六

塚のかくひ乃とゐる石原　堂

名

薦僧の師によらるあまたの弟　蕉

今もきゝ聞えしと川乃家　葉

うつかりと後撰の風を慎まし　六
又まゐりたる四国ゆかしき　堂
朝露に濡(ヌレ)わたりたる藍の花　蘭
とられしむねから麦乃粉　蕉
百方我待ちつくる井戸の端　堂
月夜に髪をあらひ揉(モミ)出し　六
火ともして砧打てつゝ子を寝せ　蕉
せん様かくるわしの物哉　棠

うつすゑ川の風に流て　六
ゐる観音ならし詣る人数　堂
ウ
今見ゆる草物織を寄進ぢ(チ)　棠
まもりの縫けり誰まくらなく　蕉
葭(ヨシ)垣の木あかりさゆる坪の内　堂
月無くあかり出る二月朔日　六
初花に伊勢此蚫のとれそめて　蕉
鉤(ク)権(ノギ)なうやく宮川の上　棠

支梁亭口切

口切に境(サカイ)の庭ぞなつかしき　芭蕉

笋ゐんでさき薮乃また川霰　支梁

山荘れ笠てよ雑へらさ草まなかし　嵐蘭

秋の野馬の振ひ乃形　利合

旅人乃喰しに月の咽かへる　洒堂

大戸銭あげたりする繹女　岱水

鶉乃たまごの数を産たるへ　桐奚
あつさに橋をわたしかねたる　也竹
孫子すむ田乃柳掘捨らく　梁
掛菜まじりに打大豆の汁　蕉
袖ぬれる雨にもあらぬ蜂の夜　合
澄かへる風に空坊乃極　堂
ばらりと織部しなる乃なれへ　水
消て乞食の蚊やもなき月　蘭

行雲は長つ乃園を秋立て　堂
露にあらずきし一瓢の錆　梁
西白入ル花まてし庵の間中床　竹
萵は二葉のそよそよあのめく　奚
みや古茂は去年より御身に思はれて　合
明んまで篭る釈迦堂農家　堂
咲物て無下になるとも猿すへか　蕉
名にもならず枇杷すうはいな　蘭

九早して獨すまあかき藤の宿　奚
清げに注連をはれる秋家町　竹
日盛に鯔賣声を爰ところ　堂
みくしの房れ郊に川口　梁
あつきれ蛸のしつくに肩隆し　合
なくん蕎そく数門おの坂　蘭
皮剥の袖老て咲に宵れ月　蕉
上毛鳴つるし志ろお絲乃鷲　奚

谷ほくひ流しかけさる竹袋代　竹
太刀持ちろわ姉こころ本かふ　堂
抱亭も蕨餅本あるしく見　蘭
盆に築中陣九薬乃数　梁
花盤御室の路のん通ゆ　奚
書めく葉接まの郷八錦也　合

九月すゑあまり翁に供せられ
て浅草の末嵐竹亭を訪ひて
幸に十句を吟す其子のたえん
るに我残しとて洛の何かぬもよ
如しそのあとをつく

荊かゐやその田地上の秋乃雲　酒堂

蒼くる月より城かゆる了　嵐竹

夜さり川麓(フモト)ハゐるのさゞめて　芭蕉

糞(コヘ)亭しけゐる送乃旁一雨　北鯤

古戦場月に錆たる胄わくる里　嵐蘭
志らしん追る我まゝの笠　堂
ウ
さし汲の門乃柱に寄せて　竹
窓あけ通る壁に入虹　蕉
巻葉に眉練をするたぐしら　鯤
す仏摺る房列の傍ま　蘭
餅つきの釜すへし紫雲の上　膳所 昌房
塲よりさかる鰤の捕漬　正秀

小作ある田燃しさへあかし　臥高
鶏(トリ)も鳴かぬと月待乃恋　探志
懐にかとほす涓の中くやしさ　游刀
とつて戴く三方の熨　野径
花の張射横(ヨコ)鏑(カブラ)防(フセ)くらん　京 去来
纏にとる心のあげる春雨　仝
暖(名)に掛る狐乃耳うちて　野童
池の小隅に井のまゝ音　仝

焼付る蛤は東座の錦乃月　史邦
風に寒のいる賊の破れ戸　仝
老僧の帽子かぶりておる秋の暮　景桃
太鼓うちあきる深き更乃宮　仝
六月を踊の二葉の麦刈て　素牛
たてて鈴子乃小座敷しまふ　仝
操(アヤ)ありし梁の上けるき操の総(ノサ)　大坂 之道
村雨すこしつる段下りる冬の日　仝

枝垂る松の階子さしかけて　車庸
二階無て家のあるらし　仝
う(ウ)すへよかかるの嶽にゆるさるるて　採志(ぜ)
女夫らしく娘らく木庵の禅　遊刀
總入金飯山を公事なすき花の春　正秀
長芋の芽のさとめる去る去　臥高
里裏のすゞき起せは寺よの雪　野径
うすむ夕部の嵐とる太　昌房

松の中　　曲翠

象の鳴やむ非乃ハ若葉への郷

おほろの月に樵つゝし　　洒堂

新篭貫子もん二重ゝ巻く縫出来て　　仝

赤きすりゝ戦ふ虫の俺ら　　翠

嘩ゝ戦茂白の翔乃矢穿れ　　仝

鎗ふとの絲をあくる海村　　堂

ウ
涼野を登しきりれ下屋敷　仝
後りんの慈悲を噉(イリ)續(アヒ)よさく　翠
穢の利を志ゑんて百つなすゐ画　仝
母とむねこゞてくをあなつる　堂
甚だしき田の荒作す涼晩く　仝
嵐の穴をあまさく二ン年　翠
花吸と鳴鷸のひよしかく　仝
菖蒲もの哀を律しむ鳳占衰　堂

侘しさや甲斐路の夕霧の小麦餅　仝
志ところま咲て赤ふ雛以　翠
類少女を洲して月を取り孫メ　仝
悪七兵衛うけきよう秋　堂
名
世の中を手習もいくすまの盃で　仝
さゝしうそ剃月額(サカヤキ)刀形り　翠
通天の紅葉を地うつ及ぬ時分　仝
錢切りし大根の湯煮　堂

追おろし大もなきの上に寝て　仝
山荘錦のかゝれ折り行　翠
菊ゆりて花乱しとなふる　仝
恋もかさ川に城下乃月　堂
よし菖蒲ゆうゆ薬師押合て　仝
ところてん喰こそおしま　翠
笠縫の里やみこなる竹の皮　仝
何をかゝり行こそ子鳴　堂

待宵の身をまさる四川の絶　仝
おしてちうめ紅緒の下帯　翠
逗留の男をあきれて口おしよ　仝
門よちて涼みたそかれ見ゆる　堂
まめの花甍へしこる増上寺　仝
増り去る紀　多礼蛸り　翠

忘年書懐　素堂亭

節季候

節季候の雀のわらふ出立かな　芭蕉

餅春

餅つきやあがりかねたる鶏の泊屋(トヤ)　嵐蘭

衣配

文箱にもん模(モ)様(ヤウ)みん衣くばり　曽良

佛名

佛名や饅頭ちる香の落葉の里　洒堂

歳暮

腹中の反古見わけん年のくれ　素堂

餘興

ひとしほ逢盃に桃の花書ん　洒堂

膝まのせてる琵琶をうらし　素堂

青みぬ月さくら寝覚のなを見るに使りしらく　芭蕉

京寺町二条上町
井筒や庄兵衛板

元禄六